

第 46 回中国・四国地区社会教育研究大会 徳島大会 参加報告

丸亀市まなび文化課

○アトラクション 徳島県立徳島商業高等学校 阿波踊り部のみなさん

創部してまだ 9 年目ということで伝統文化が見直され文化継承の取り組みの表れと感じた。阿波踊りは県下全体の文化として老若男女に親しまれ、香川県にも踊り子連があるほど人気がある。笛や太鼓の鳴り物も上手で舞台発表としても凄く洗練されていた。卒業してもどんどん活躍できる場所があり将来性を感じた。

○基調講演 『偶発性をデザインする』

大南氏は地元の神山町で 30 年くらい前から、過疎化している地域が生き残るための活動を始める。町に若者の雇用は少ないため、芸術家を招聘する事業「アートインレジデンス」をはじめ、将来まちに必要とされる、職を持った人や開業したい人を呼び寄せるため空き家を改修した。また、リモートワークができる環境を整備し、場所を選ばない企業を誘致し雇用を創出、移住者が 10 年ほど前から増加した。偶発性と言っているのは、町に来る人が人を呼び、アイデアが集まり、起業支援から高等専門学校ができるまでに広がっていったということだろう。

○パネルディスカッション 「誰もが輝く ウェルビーイングの社会を目指して」

パネリストの一人、合同会社 RDND（アール・デ・ナイデ）の代表は、「(ごみ)ゼロ・ウェイスト」宣言している徳島県上勝町出身で、子どものころから身についた環境に対する意識があり、中学生の時に参加したアジアの地域の子どもたちが集まるプログラムで、上勝町の取り組みを紹介した。とても先進的な取り組みとして評価され、小さな町からでも世界を変える可能性につながるものを感じたことが故郷に戻って起業したきっかけだった。滞在を通して地域の良さを感じ自分自身を知ってもらう「INOW（イノウ）」プロジェクトは、突然浮かんできたアイデアではなく、これまでの経験や問題意識に基づく中で形成されている。滞在型の体験学習は価値のあるもの・ないものの気づきとして、若者への貴重な贈り物となるだろう。

○第 1 分科会 学校と地域の連携・協働

① 地域一体の「やってみん！」～公教育と社会教育の相互作用を目指して～

岡山県西粟倉村には高校がなく 15 歳まで固定化された関係が続き、卒業後に村外での新しい生活に馴染めないなどの課題があった。一般社団法人 Nest は、学校と地域の関係を継続的に構築し、村の教育方針や子どもたちの「やってみたい」を伴走する組織として設立された。学校教育では教育コーディネーターとして教員と地域学習の支援、社会教育では、子どものキャリア教育として成功・失敗体験をさせるプロジェクトを実施している。スタッフ 3 人は県外出身者だが、教育委員会とは連携されており、教員や職員の異動に左右されない利点がある。今年 3 月には拠点施設が完成し、これからは多くの地域住民にも利用されることと期待する。

② 阿波人形浄瑠璃を未来につなぐ

徳島県は江戸時代から人形浄瑠璃が盛んな地域で、勝浦町には人形座「勝浦座」があり、昭和 37 年創部の小松島西高等学校勝浦校民芸部で当初から指導にあたっている。町外から人形浄瑠璃のため入学希望する学生や卒業後も続けている若者はいるが、平成 8 年から小中学生に実施している「子ども阿波人形芝居教室」の参加者は少ない現状である。また指導者の高齢化とボランティア要素が多いため後継者の育成には至っていないようである。今後は他団体との連携により人形浄瑠璃が阿波おどりのように発展していく余地があると感じた。

○研究大会に参加しての感想

どの発表者の方も将来的な見通しを考え、現状の課題を解決する行動を取られている。できない理由を考えるよりできることを見つける、西粟倉村のように子どもたちへの財政的な投資もそうであるし、地域と行政との関わりにより多くの収穫が得られるように思う。パネリストをはじめ、県知事や徳島市長もとてもアグレッシブで、阿波踊りの精神が息づいているまちだと改めて感じた。